

第十六回 開高健ノンフィクション賞受賞作発表

『空をゆく巨人』 川内有緒



かわうち ありお ノンフィクション作家。東京都生まれ。日本大学芸術学部卒業後、米国ジョージタウン大学で修士号を取得。米国企業、日本のシンクタンク、仏の国連機関などに勤務後、フリーのライターとして評伝、旅行記、エッセイなどを執筆。その傍らギャラリーも運営。『パウルを探して——地球の片隅に伝わる秘密の歌』(幻冬舎)で、第33回新田次郎文学賞を受賞。著書に『パリでメシを食う』(幻冬舎文庫)、『晴れたら空に骨まいて』(ボプラ社)など。

第十六回 開高健ノンフィクション賞 受賞者インタビュー

小泉まみ＝インタビュー・文

日本のノンフィクション文学に大きな足跡を残した開高健氏を記念する「開高健ノンフィクション賞」。第十六回受賞者・川内有緒に、受賞作に込められた思いを聞いた。

福島県いわき市の郊外。豊かな自然が広がる里山の一画に、手づくりの野外美術館が存在する。二〇一五年の秋、川内が旅をテーマにしたネット記事を書くためにこの「いわき回廊美術館」に取材を申し込むと、電話の向こうの相手は「人がたくさん来ると困る」と、取りつくしまもなかつた。それが本作の主人公の一人、「いわき万本桜プロジェクト」の代表・志賀忠重だ。この物語は、志賀ともう一人の主人公である世界的現代美術家・蔡國強（中国福建省出身）がいわきで出会い、一緒に壮大な芸術作品を生み出していく軌跡を追ったノンフィクションだ。

芸術家と「おっちゃん」の不思議な関係

「人生は、自分にとつて
居心地のいい場所を探す旅なのかも知れません」

聞いてヘトヘトになりました

それなのに川内は、もっと志賀の話を聞いてみたい、と思ったそうだ。

志賀は記事がアップされるとすぐに「いい文章だった」と喜んで連絡をくれた。以来電話やLINEのやりとりが始まり、程なく川内は友人と回廊美術館を再訪する。そのとき、志賀は捕れぱばかりの野生の猪を「今から食うべ」とふるまい、帰りには二〇キロもの猪肉をお土産に持たせてくれたという。「本当に強烈な体験でした」と川内は嬉しそうに笑った。

その後も川内は、二～三カ月に一度の割合でいわきを訪れるようになる。そして二〇一六年の春、初めて蔡國強と出会った。

「あの日、蔡さんと志賀さんは回廊美術館の山に置く高さ八メートルの『再生の塔』をつくっていて、大きな作品だからといへんなのに、少年がはしゃぐみたいに楽しそうで。ふつうの友情とは違う面白い関係だなと思いました。スーパースターと作業着のおっちゃん、どちらが上とか下とかいうのもなく、リスクペクトし合いながら、作品をつくることに集中しているんです

蔡國強は、「火薬画」の制作や花火を使ったパ

川内は初めて会ったときから志賀の「普通じゃない魅力」に惹きつけられたという。
「志賀さんの話は驚くほどスケールが大きくて、美術館をつくった経緯や蔡さんのこと、万本桜プロジェクトのことなど濃い話を五時間くらい

正賞＝記念品
副賞＝三〇〇万円
主催＝株式会社集英社
主催＝公益財団法人一ツ橋綜合財團

選考委員
姜尚中、田中優子、藤沢周、茂木健一郎、森達也
(五十音順、敬称略)

最終候補作
『ダリエイン
—コロンビア・パナマ国境、
ジャングル突破行』
北澤豊雄
『箱根の区を駆ける者たち』
佐藤俊

『闇からのエクソダス』
舟越美夏
川内有緒

よね

川内はこれまで、既存の価値観や常識に縛られずに生きている人たちをテーマに、ノンフィクション作品を書いてきた。海外暮らしが長かった川内にとって、同調圧力が強い日本は息苦しいときもある。だから異なる価値観や文化を持つ人同士が、お互いを尊重し合える社会になれば、という思いで筆をとつてきた。だが「日本でもやりたいことを精一杯やっている人には会うと自分もののびのびとした気持ちになります。その生き方を伝えることで、少しでも楽に生きられる人が増えるといいな」と。



志賀忠重（左）、蔡國強（右）と談笑する川内。 © Kazuo Ono

いに強く突き上げられる。多くを失った今だからこそ、世界に誇れるような場所をつくりたい。空からも桜が見えるようだ。こうして始まつたのが、「いわき万本桜プロジェクト」だ。

志賀が考えた植樹の目標本数は九万九〇〇〇本。目標達成までに二五〇〇年はかかるといふこの壮大な計画に惹かれ、全国から人々がボランティアや植樹に訪れるようになった。

「志賀さんはいつも『楽しい』ということをす

蔡が日本の公立美術館で初の個展を行つたのは一九九四年、三六歳の時である。それはやはりいわきでだつた。その「いわき市立美術館」での個展に向け、蔡はたくさんの作品プランを

蔡國強と「いわきチーム」

そんな彼女が「自由に生きる人の究極バー・ジョン」だという志賀と蔡。だからこそ川内は二人に惹かれ、「一人の物語を書くなら、それは自分でやりたい」と思つたのだろう。

「蔡さんも志賀さんも、生きるってこんなに楽しくていいのか、と思うほど樂しそうで。でも決して恵まれていたわけではなく、自分の力でそういう人生をつくり続けているのがすごい」

川内はこれまで、既存の価値観や常識に縛られずに生きている人たちをテーマに、ノンフィクション作品を書いてきた。海外暮らしが長かった川内にとって、同調圧力が強い日本は息苦しいときもある。だから異なる価値観や文化を持つ人同士が、お互いを尊重し合える社会になれば、という思いで筆をとつてきた。だが「日本でもやりたいことを精一杯やっている人には会うと自分もののびのびとした気持ちになります。その生き方を伝えることで、少しでも楽に生きられる人が増えるといいな」と。

抱えて、前年にいわきに移り住む。そのひとつに、新月の晩に海の沖合で火薬を爆発させ、炎によって地球の輪郭を描き出そうという壮大な野外作品「地平線プロジェクト」があった。

あまりに大がかりなので予算が見合わず、志賀は実行委員会を立ち上げ、周囲に協力を仰いだ。するといわきに住む、やはりほんと芸術とは無縁の人々が、手弁当で参加してくれた。

『いわきでの『地平線プロジェクト』を無事成功させたのちに、蔡さんはアメリカへ移住しました。その後『市民を動員した大プロジェクトを』とたびたび依頼されるようになつたそうで

わき万本笑プロジェクト

だから、『いわきチーム』とやることは、『いわきチーム』としかできない』という言葉です。それを聞いて、蔡さんにとって、まだ無名だった頃に出会った『いわきチーム』は、本当に別な存在なんだなと思いました

しかし、それだけで終わらないのがこの物語の魅力だ。

二〇一年の福島第一原発事故により、いわきも放射能に汚染された。放射能の人体への影響、長く使えなくなつた土地、そして汚染地域へ近寄りたくないという外部の人々の感情……。そうした負の遺産を未来の子どもたちへ引き継いでしまうことに、志賀は怒りや悲しさ、悔しさを感じていた。

そんなある日、志賀は「山に桜を植えたら、

であり、友人や家族であり、あるいは仕事かもしれない。そうした意味でも、『いわき万本桜プロジェクト』や『いわき回廊美術館』は、誰かにとつての居場所となるような存在だと思いま
す

いに強く突き上げられる。多くを失った今だからこそ、世界に誇れるような場所をつくりたい。空からも桜が見えるようだ。こうして始まつたのが、「いわき万本桜プロジェクト」だ。

志賀が考えた植樹の目標本数は九万九〇〇〇本。目標達成までに二五〇〇年はかかるといふこの壮大な計画に惹かれ、全国から人々がボランティアや植樹に訪れるようになった。

れると思うんですね」
並行して、志賀と蔡が密かに温めていた構想
が、「いわき回廊美術館」だ。蔡の斬新な設計案
を受けた志賀が延べ四〇〇人のボランティアと
二〇一三年の春に完成させた。

人生は居心地のいい場所を探す旅

東日本大震災から、すでに七年が経過した。
福島県内一二市町村にまたがっていた避難指示
区域は徐々に縮小してきているが、いまだ帰る
ことができない住民も多い。

「天安門事件」で帰国を諦めた蔡や、原発事故
でかつてのいわきを失った志賀、そして大勢の
福島の人々の体験を通して、川内は人にとって
故郷とは何かと考えさせられたという。

ワシントンにいても、パリにいても、東京と
いう故郷はなくならなかつたと言う川内。そん
な「帰る場所、居場所」があるからこそ、人は
どこへでも行けるのかもしれない。

「人生というのは、自分にとつて居心地のいい
場所を探す旅なのかもしれません。それは故郷

本作を書き上げた今、思うことは何か。「今まで、誰にも知られていないひつそりとした物語とか、世の中の暗部や社会問題をあぶり出すような作品のほうが、意義があると思つていました。でも、もうそんなこだわりは捨てました。友情、平和、明るい世界をあえて描いてもいいじゃないかという覚悟が持てたような気がします」

アートや文化には、希望を生み出す力がある。読み終えた後、読者にもそう信じさせてくれる作品だ。

